

4 重点目標を達成するための今年度の取組と評価基準・評価結果

A 重点	C短期経営目標（年度末までにどのような状態にするか）	具体的な方策	具体的な取組		成果		自己評価					
			評語	取組に関する指標（可能な限り数値で）	評語	成果指標（可能な限り数値で）	取組指標		成果指標		考察(コメント)	改善策
							中間	年間	中間	年間		
1 豊かな人間性の育成	「みんなのきまり」を守っている児童の割合を90%以上とする。うち、◎を70%以上とする。	「みんなのきまり」を指導し、各学級で一か月の振り返りを行い、取組状況の確認と改善点の作成、次の目標を設定する。	A	3/4(年7回)以上は児童評価を生かした指導の改善や継続に取組んだ	A	きまりを守っている児童90%以上 ◎70%以上	B	D	B	D	児童◎＋○93.0%、◎40.4%であり、中間より少し高くなっている。いつも守っている、いつも守ることができるよう意識を高めることが必要である。	きまりを守ることにについて児童の意識を高めるために、学校として一体感をもって取り組むことが必要である。新校舎移転の際に「みんなのきまり」を改めて確認し全校活動として取り組んでいく。
			B	1/2(年5回)以上は児童評価を生かした指導の改善や継続に取組んだ	B	同80%以上 ◎60%以上						
			C	毎月児童評価を実施し、児童に活動を振り返らせた	C	同70%以上 ◎50%以上						
			D	児童評価が実施できないことがあった	D	同70%未満						
	いじめの早期発見、早期対応を図り、事案確認から1か月以内に解決する。	学校いじめ防止基本方針に則り、年間をとおしいじめ未然防止の取組としていじめ防止標語・ポスター作成、あいさつ運動などを行い、いじめ防止を常に児童に意識付け。児童へのいじめに関するアンケートを年間3回以上実施する。	A	他教員と協同して100%対応した。常にいじめ防止を意識して取組んだ。	A	1か月以内に全件解消	A	A	A	A	いじめの認知について教職員の意識が高まった。また、未然防止のための取組(防止標語やポスターの作成、自己肯定感を高める指導など)を実施した。	次年度は、学校独自のアンケート実施、児童によるいじめ防止に関する劇の発表など、取組を更に発展させたい。
			B	アンケートや発生事案に100%対応した	B	2か月以内に全件解消						
			C	アンケートや発生事案に未対応があった	C	3か月以内に全件解消						
			D	計画の未実施があった	D	3か月以上の継続指導あり						
	異学年での交流が楽しい児童の割合を、全学年で80%以上とする。	たてわり班活動(未来タイム、たてわり遊び等)をできる限り推進する。	A	学級でたてわり班活動を振り返った	A	低80%以上、中80%以上、高80%以上	D	C	C	C	異学年での交流が楽しい児童、全校82.4%、低90.8%、中77.6%、高76.0%であった。取組が十分にできなかった。	オンラインでの活動により、全校一斉での活動を行うことはできた。次年度の活動として何ができるか考えていきたい。
			B	振り返りで担当班リーダーを指導した	B	低80%以上、中80%以上、高70%以上						
			C	工夫して活動を実行できた	C	低70%以上、中70%以上、高70%以上						
			D	活動が実行できなかった	D	低70%未満、中70%未満、高70%未満						
	自分を大切にしている児童を80%以上、友達を大切にしている児童を90%以上とする。	児童の発達段階や個人差に配慮した適切な指導を実施し、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う。各児童の道徳振り返りシート等を用いて学習状況や道徳性に係る成長の様子を捉え、適切な評価と指導を重ねることにより児童の自尊感情を高める。	A	振り返りシートを活用し、学習状況の把握と自尊感情を高める指導を実施した	A	自分80%以上、友達90%以上	A	A	A	A	自分87.5%、友達98.2%で中間と同等であった。5年生では道徳において交換授業に取り組んでいる。	自分を大切にしていることについて否定的な回答が多い学級の状況の改善に引き続き取り組んでいく。道徳授業について、趣旨を捉えた授業改善を今後も更に進めていく。
			B	他教諭の授業を参観し、授業改善を図った	B	自分75%以上、友達85%以上						
			C	全時間において、道徳科の趣旨に基づいた授業を実施した	C	自分70%以上、友達80%以上						
			D	道徳科年間指導計画を確実に実施した	D	自分70%未満、友達80%未満						
	特別支援教育に関する理解を深め、学級経営等に生かす。通常と特別支援学級の児童の交流を図る。	学校生活支援シートを8月末までに作成する。特別支援教育の手法や合理的配慮を通常学級に取り入れる。特別支援学級児童の特性を理解し、全教職員で支援にあたるとともに通常学級との交流を図る。特別支援教育について、児童に発達段階に応じた理解をさせる。	A	特別支援教育について、児童に発達段階に応じた理解をさせた	A	交流により豊かな人間性が育まれたと感じる児童が70%以上	C	A	B	A	ひまわり学級との交流は楽しいという児童は74.4%で、中間より少し高くなった。	今年度、ひまわり学級が学級児童の紹介ビデオを作成し、各学級で視聴するなど、直接関われない中で取組を工夫したことを含め、今後の活動を工夫していく。
			B	通常と特別支援学級の児童の交流を図った	B	全学級が通常と特別支援学級の児童の交流を図った						
			C	教育活動に合理的配慮を取り入れた	C	全教員が合理的配慮を取り入れた						
			D	必要な児童の学校生活支援シートを作成した	D	学校が楽しい児童90%以上						
2 学力の向上	目標時間の家庭学習を行っている児童の割合を85%以上とする。	家庭と連携した家庭学習強化月間を実施する。年間をととして学年の家庭学習目標時間に沿った量の毎日の宿題や自主学習について提示する。	A	家庭学習指導を90%以上の日に実施した	A	目標時間達成の児童85%以上	A	B	A	B	「家庭学習の手引き」を作成・配布し指導した。児童評価は83.2%と中間より上昇した。6年生の中間テストの際6年児童は1か月以上前から試験勉強に取り組むなど、計画的・自主的に学習することができた。	タブレットの児童一人一台配備に係る家庭での学習のあり方について、保護者の協力内容を明確にして周知していく。
			B	同80%以上実施	B	同80%以上						
			C	同70%以上実施	C	同75%以上						
			D	同実施70%未満	D	同75%未満						
	図書とタブレットそれぞれの活用の良さを理解している児童を80%以上とする。	情報センターとしての学校図書館の機能整備と計画的・効果的な活用、図書とタブレットの特性を生かした調べ学習を実施する。また、次年度の年間活動計画を12月までに作成する。	A	図書とタブレットの特性を生かした調べ学習を実施し児童にそれぞれの良さを指導した	A	理解している児童80%以上	B	B	B	B	学校図書館の活用については課題が残る。タブレット活用については積極的に行っている。	学校図書館運営計画を整備する必要がある。それぞれの活用について、次年度に教職員への研修実施を計画する。
			B	図書とタブレットの特性を生かした調べ学習を実施した	B	理解している児童70%以上						
			C	学校図書館の活用計画を確実に実施した	C	理解している児童60%以上						
			D	学校図書館の活用計画の未実施があった	D	理解している児童60%未満						
	中野区学力調査レベルのテストにおいて到達度80%の児童を80%以上、50%未満を0とする。	東京ベーシックドリルを活用した学習内容の定着と補充指導、ICT機器等を効果的に活用した指導法の工夫改善、区教員の活用や授業改善を実施する。	A	区任短教員と連携して既習事項の補習を行うなどして学力向上を図った	A	80%到達度80%以上、50%未満が0	B	/	A	D	区学力調査結果は、62観点中58項目が平均、目標値を上回った。4項目は同程度であった。区分別133中70項目で80%を上回った。70%を上回ったのは87.2%の項目であった。50%以下が1項目あった。	自己肯定感を高め、できたことの心地よさを児童にインプットしていく。そのために、教職員が、児童をよく見て気付き、伝える力を伸ばす必要がある。脳科学についての研修を実施し指導に生かしていく。
			B	ベーシックドリルや補充教材を活用して効果的に補習指導を実施した	B	80%到達度70%以上、50%未満が10%						
			C	ICT機器を効果的に活用した授業改善に取り組んだ	C	80%到達度70%以上、50%未満が20%						
			D	授業改善の意識をもって毎週の週ごとの指導計画を作成した	D	80%到達度70%未満、50%未満が20%以上						
3 体力の向上と健康の保持増進	体を動かすことが楽しい児童の割合を85%以上とする。	体育学習の内容、方法やかかわりの工夫、体育朝会、年間2回設定した体力向上月間を実施する。	A	年間をととして休み時間の遊びなど体を動かす取組の工夫を行った	A	体を動かすことが楽しい児童85%以上	B	A	B	A	体を動かして遊んだり運動したりすることが楽しい児童91.4%で中間より少し上昇した。新生活時程により、休み時間の校庭・体育館遊びを実施した。	次年度は校庭整備完了が6月である。今年度よりも広いため、校庭遊びの機会を冷やしていけると考える。体育学習における制限を鑑み、授業改善を推進していく。
			B	運動に親しむための授業改善に取組んだ	B	同80%以上						
			C	体育学習における児童同士のかわり方を工夫した	C	同70%以上						
			D	体力向上月間の取組を推進した	D	同70%未満						
	健康に元気に過ごしている児童の割合を90%以上とする。	校内委員会や金曜日の夕会において児童の情報を共有し、適切かつ効果的な指導を全教職員で行う。心と体の関係についての体験的学習を全学年で実施する。1月を食育・健康教育推進月間として取組を強化する。	A	他教員と協同し、児童への適切で効果的な指導・支援に取組んだ	A	健康に元気に過ごしている児童90%以上	A	A	A	A	健康に元気に過ごしている児童、全校93.6%であった。高学年が88.4%であり改善が必要である。	自己の生活について児童自身が改善を図ることができるよう支援を行う。
			B	児童への適切で効果的な指導・支援に取組んだ	B	同80%以上						
			C	計画を100%実施した	C	同70%以上						
			D	計画の未実施があった	D	同70%未満						
	学年に応じたSOSの出し方を理解している児童の割合を90%以上とする。	発達段階に応じたSOSの出し方について具体的に指導する。特に、年度始め、長期休業日前は重点的に行う。教員は児童の相談時の言葉や相談を受けとめるときの言葉について知識を身に付け、SOSを敏感に受け止める感覚を養う。	A	重点時期に確実に指導した	A	SOSの出し方を理解した児童90%以上	A	A	A	A	「だれかに相談できる」児童、全校76.4%、低80.6%、中68.5%、高79.0%であった。	中学年における相談相手の確立を目指し、重点的に取組・指導を行っていく。また、SOSの出し方の理解と実際の行動の差を埋めるためにも、家庭へのSOSの出し方についての教育内容を周知し、連携を推進していくことが必要である。
			B	SOSを敏感に受けとめる感覚を身に付けるために研修・研鑽を重ねた	B	SOSを受けとめる感覚が向上した(教員)						
			C	具体的なSOSの出し方を指導した	C	SOSの出し方を理解した児童75%以上						
			D	適切に指導できなかった	D	SOSの出し方を理解した児童50%未満						
安全に気を付けて生活している児童の割合を90%以上、自転車安全利用五則遵守を95%とする。	安全指導計画に則った指導を確実に実施する。	A	安全について、年間を継続して意識をもって児童に適切に指導した	A	安全に気を付けて生活している児童90%以上、自転車安全95%以上	A	B	A	B	安全94.5%、五則92.2%であった。家庭と連携した自転車利用に係る意識の向上を図る必要がある。	自転車の安全利用については、保護者の協力が不可欠である。PTAとも協力して児童の安全確保を進めていく。	
		B	学年で共有化した指導を行った	B	同85%以上、同90%以上							
		C	学校安全計画に基づく指導をほぼ100%実施	C	同80%以上、同85%以上							
		D	学校安全計画に基づく指導ができなかった	D	同80%未満、同85%未満							
4 働き方改革	時間外勤務の上限について月45時間、年間360時間を目標とする。特例の場合においても区の条例施行規則を遵守する。	庶務事務システムを活用し業務量の適切な管理を図る。	A	月45時間以下が10か月以上、年間では360時間以下	A	フィードバックバランスに改善があったと感じる教職員が80%以上	C	D	C	D	職員34人中、月45時間以上が、4月0、5月0、6月20、7月15、8月0、9月18、10月17、11月14、12月13である。12月時点で年間360時間超えは、12人である。Aは14人の見込み。	今年度の結果をもとに、各自が自己の働き方について改善を講じる。また、学校として、互いを尊重しつつ、健康管理の面で健全な労働時間を厳守していく。
B	月45時間以下が8か月以上、年間では360時間以下	B	同75%以上									
C	月45時間以下が6か月以上、年間では360時間以下	C	同50%以上									
D	月45時間以下が4か月以上、年間では360時間以上	D	同50%未満									